



二つの晩年——西東三鬼の晩年 三橋敏雄

西東三鬼は明治三十三年（一九〇〇）五月十五日、当時の岡山県津山町に生まれ、昭和三十七年（一九六二）四月一日、神奈川県葉山町の寓居で亡くなられた。六十二年足らずの生涯であった。昨今の長寿国日本人の平均寿命を思いあわせるまでもなく、短命であったと申すよりほかはない。

それにつけても、いま与えられた命題「西東三鬼の晩年の句境」に従って考える前に、まず三鬼の晩年を何歳ごろからのこととして見定めたらよいものか、と迷う。なぜかという、私にとっての三鬼には、句業にかぎって二度にわたる晩年があるように思われるからである。

とりあえず、その俳歴をかえりみよう。三鬼の俳句作品がはじめて見えるのは、俳誌「走馬燈」昭和八年十一月号の日野草城選句欄に入った二句であるから、ときに三十三歳。以来、死に至るまでの期間は、ほぼ三十年ということになる。しかし、その間、当時いうところの大東亜戦争の前夜から、日本の敗戦降伏までの五年間は、思想警察による弾圧をうけ

作句発表を禁じられていたので、この期間を差引けば、俳人としての活動は約二十五年と見てよからう。そして、そのはじめの七年間ほどが、三鬼における新興俳句時代に当たる。

三鬼と新興俳句との出合いは、誰の場合とも同じように偶然のことだったが、三鬼がこれに自己表現をかけるべく決意し、句作に専念することとなったときの年齢は、当時の新興俳句仲間たちにくらべて、けっしてもう若いとはいえなかった。だから、いつも先を急ぐ思いに駆られたらしい。いいかえれば発奮の度合が高かったのである。この発奮は三鬼における特異な才能の開花を十分にうながした。まして、それ以前の三鬼の情緒生活は、英領海峽殖民地シンガポールへの渡航をはさんで、いわば浪費に近い青春とともに在った。そういう経験も三鬼による新興俳句の表現に力を藉すものとなる。すでにして日常の失意の状態から脱出した三鬼は、前記の「走馬燈」に拠って、たちまち新鋭の称をもって目され、昭和十年に入り、招かれて新興俳句の主流誌「京大俳句」に

加盟した。その年の四月号より自選作品発表の場を確保し、以後、同誌を主拠点として急速に独自の斬新な俳句表現様式を確立していくのである。

あわせて同時期に並行して三鬼は、居住地東京での新興俳句系各誌に拠る、新鋭俳人たちの積極的な交流をはかり、たとえば「新話会」や、これを発展的に解消させた上での「十士会」などという、連絡機関の創設と運営の世話役を買って出る。そして、ついには同志とともに、新興俳句綜合誌「天香」を昭和十五年四月号をもって創刊するまでに漕ぎつけた。

しかし、当時の治安維持法の下、その違反容疑を名目とする新興俳句弾圧は、同年二月以降、数次にわたり、同派の主要俳人に対する一斉検挙のかたちをとって行なわれた。先にも記したように、三鬼もこの難をまぬがれ得ず、結果的には起訴猶予になったものの、執筆禁止を命ぜられ、その後の大戦中を這塞して過ごすこととなる。この弾圧の進行過程で、やむなく終刊となった「天香」昭和十五年六、七月合併号（第三号）は、六月の発行だが、同号に載った〈五月の河〉と題する一連五句は、次のとおりで、三鬼の新興俳句時代最後の作品である。

半身に 五月烈しく河臭ふ
河暑し 油と友の顔 流る
河黒し 暑き群集に友を見ず
暑き河に 憤怒の唾を吐き又吐く
唾濁れ 怒れる汗は黒き河に

この一連は、東京銀座の細川活版所において、前記「天香」の出張校正中に、三鬼が急遽追加掲載したものであった。同席者は、校正応援の石田波郷と、かくいう私。〈五月の河〉の「五月」は、「京大俳句」関係としては第二次の主として東京在住俳人に対する一斉検挙が行なわれた、昭和十五年五月三日払曉のことにかかわる。また、この「河」は作品を離れていえば「河」ではなく、実は、細川活版所に近いかつての外濠である。これに架けられた数寄屋橋もいまは無いが、その辺からの展望が作品〈五月の河〉の環境であった。ここに見られる句中の「友」は、さきに検挙された俳句仲間を指す。なお「憤怒」は、横暴な権力行使に対する反抗精神の直截な表明であることはいうまでもない。

このとき以後、〈五月の河〉一連の作品は、三鬼によって、どの自選句集にも採録されることはなかったが、いわば狂気の動乱時代にあつて弛まぬ、すさまじい主張のリアリティーがある。これまでの三鬼作品に似ず表現は粗い。作品の成立事情を知らなければ理解困難なところもある。しかし、粗い表現なりの激情を、即刻こうした句々のかたちに書きつけ発表せずにはいらなかった挫折感を思えば、これを三鬼における新興俳句時代最晩年の優作として、いま改めて認識したい。いったん認識するならば、志高く持して生き抜こうとしながら、しばしば挫折感を強いられる社会的、個人的情況のうちにあって、これらの句々は、当初の三鬼をめぐる情況の特殊性を超え、いつしか誰にも通じる表現の普遍性を獲得

するであらう。

私にとつての三鬼には、句業にかぎって二度にわたる晩年があるように思われる、と本文のはじめに記した、その一度目の顛末は何となくこじつけめいてきこえようが、ともかく三鬼の新興俳句は、自身の更なる表現の可能性ともども、このとき外力によつて後続を絶たれたのだ。いわば殺されたわけである。したがって、その直前の叫びである作品へ五月の河へに知る句境——俳句に表出された心境——を、私をもふくむ新興俳句時代の晩年感に引きつけて、強く記憶しておきたいのである。

ところで、晩年とは人一代の末年を指している言葉で、本来は老年と同義のようだが、その人の死の事実を前提としなければ、何歳ごろからと特定するわけにはいかない。しかも老少不定、みずから意識する生きながらの晩年感に、加齢の多寡は殆んど無関係である。

晩年感といえは、戦後早々復活した三鬼の俳句表現において、すでに濃厚であった。たとえば、石田波郷編集の総合誌「現代俳句」昭和二十一年九月創刊号にはじめて発表された、「中年や独語おどろく冬の坂」、ついで新俳句人連盟機関誌「俳句人」同年十一月創刊号に発表の、「中年や遠くみのれる夜の桃」など、三鬼みずからいう「『中年感情』を基盤としよう」とした作品を先行させている。

思えば、かつて新興俳句という現代俳句の青春期に際会して、早くから一種の晩年感を支えに発奮せざるを得なかった

三鬼は、大戦中の強い沈黙の負い目に加えて、より一層痛切な晩年感を伴う「中年感情」の訪れを意識したにちがいない。この上は、これを逃げず寄つて立とうとしたのである。だが、俳句表現の上五にあからさまに置かれた「中年や」という措辞は、そのまま自己解說的に働く。同時期にお「中年やよろめき出づる昼寝覚」（初出誌未詳）があるが、以上の三句にとどめて、その後この手を用いなかったのはいさぎよい。それゆえに「中年や」は、三鬼俳句の専用語彙として、却つて永遠性を保つこととなった。

追つての三鬼の晩年を、いつごろからに見定めようか。かえりみて、三鬼居住地の変転を辿れば、新興俳句時代を通じての東京大森から、昭和十七年十二月、出奔して神戸に淹留。同二十三年二月、いわゆる「三鬼館」を追われて、兵庫県別府町に同年十二月まで過ごし、以後、大阪府香里園に転じた。同三十一年九月、離阪して神奈川県葉山町に寓居し、同地が終焉の地となった。されば、悲しくもみずからの終焉地に来往した、昭和三十一年以降を、三鬼一生の末年すなわち晩年、と観じよう。

以下の掲出句は、その間の代表的作品の一部である。

死にたれば一段高し蠟涙ツツ (昭31)
道しるべ前うしろ指し山桜 (昭32)
木枯の一夜明けたる道白し
ばら色のままに富士凍て草城忌
鳴るポンプ病者養う寒の水

寒き江に顔を泛べて魚泳ぐ
喫泉飲む疲れて黒き鳥となり
徴の家単音ひかり仏の具
青高原わが変身の裸馬逃げよ
寒柝に合せて生ける肌たたき
子が泣けば干漏いよい露はるる
仮住みのここの藪蚊も縞あざやか
真つ向に名月照れり何はじまる
白魚を濁に吸りて歎かんや
木の林檎匂い火山に煙立つ
月光のつらら折り持ち生き延びる
紙め癒やす傷やばうぼう木の芽山
虫鳴いて万の火花のしんの闇
旅ここまで月光に乾くヒトデあり
寒の入日へ金色の道海の上
老眼や埃のごとく桜ちる
うちそとに虫の音満ちて家消えぬ
秋の暮大魚の骨を海が引く
広島漬菜まつきおなるに戦慄す
死の階は夜が一段落葉降る
霜焼けの薔薇の蕾は噛みて吞む
うぐいすや引潮川の水迅く
青野に吹く鹿寄せ喇叭貸し給え
男の別れ貝殻山の冷ゆる夏

(昭37)

這い出でて夜露紙めたや魔の病
降りつもる落葉肩まで頭上まで
犬猫と夜はめつむる落葉の家
枯るる中野鳩の声の養生訓
ひよどりのやくぎ健やか朝日の樹
音こぼし——寒柝地の涯へ
ぐつたりと鯛焼ぬくし春の星
青天に紅梅晩年の仰ぎ癖
人遠く春三日月と死が近し
鶏犬に春のあかつき猫には死
春を病み松の根つ子も見あきたり

最後の一句は、昭和三十七年三月七日作の絶筆。

残余の紙幅を考慮しながら、先師晩年の作品に対し、不遜な私選の結果をここまで記してきた。すべて一読して句意明瞭。この上、解説に類するつけたしの言葉は、まったく無用と思われる。あえて付記するならば、三鬼のいのちを奪った病氣は胃癌。老衰による自然死とはちがう。六十二年足らずの生涯を短しと思うにつけ、最晩年に当たる病中吟の句々は、表現がおだやかであればあるほど、悲痛の極限をうかがわせてやまない。

先に挙げた、新興俳句時代最晩年の作品へ五月の河へからも知れるように、ときに癪癪玉を破裂させる勇気的主だった三鬼を、ここに重ねて偲び、いまは已んぬる哉の嘆きを嘆こう。